
ティオの冒険記

マスケット銃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ティオの冒険記

【Zコード】

Z3541Z

【作者名】

マスケット銃

【あらすじ】

一人の少年が冒険に出た。

名前はティオ・アルペノス。

魔族の血が半分流れる彼は冒険者だった父に憧れて、十五歳を迎えた日に旅に出る。

しかし期待と不安を胸に抱いて飛び出したのだが、いきなりとんでもない化け物と戦う羽目に！？

その後も少年の予想を右斜め上に超える出来事が次々と起こっていく。

それでも少年はくじけずに前へと進み続けて成長していく。剣と魔法とモンスターの世界で新米冒険家が成長していく冒険物語。と、思いきや、だんだんとんでもない展開に巻き込まれて……！？

第一話 旅立ち（前書き）

こんばんわ、初めまして、マスケット銃と申します。
前作はすぐにやめてしまい、申し訳ありませんでした。
今回はそつならないよう努力します。

第一話 旅立ち

カミール村

この日、一人の少年が旅に出ようとしていた。

名前はティオ・アルペノス。

この地方では珍しい黒の髪が目を引く。

背は低めだけれど冒険家だった父に仕込まれた剣の訓練と森で獵狩りをしているため、体には俊敏に動くための筋肉しかついていない。背が低くて童顔なのに彼のことを知らない人間は子ども扱いするだろう。

そして一番の特徴は尖った耳と金の瞳、魔族である母の血が強く出ていた。

祖父、父が冒険者であるティオは今日一五歳の誕生日を迎えて、前から決めていた冒険へ出ることになった。

背中に町に着くまでの数日分の食糧と飲み物や旅には必要不可欠なものが詰め込まれたリュックを背負い、使い慣れた片手で扱える幅広の剣を腰に帯びている。

見送るのは両親と村長、彼の遊び友達であるジャック、ポアラ、力一の六人。

母親であるセフィラがティオを優しく抱きしめる。

「あんまり名前を上げようとして無茶はしないでね。危ないことは加わらないで頂戴ね？」

「僕は冒険者だよ、母さん。逃げてたらなにもできないよ」

そう言って母の背中を優しく叩く。

息子がそういうことをわかっているセフィラは苦笑して、父の悪いところが似てしまつたティオの頬に触れる。

「じついうときは嘘でもいいから親を安心させるものよ」

そう言つて息子の肩をぱんっと叩いた。

父、ガルドラは豪快に笑つてティオの肩にスコップのよつと大きな手を置く。

「ま、若いうちに痛い田にあつたほつが成長できる。前を進む者に名譽は来るつて言つしな」

そう言つて腰に帶びた剣を強く叩いた。

この剣は祖父が友人の鍛冶師に創つてもらつたもので、父もこの剣を手に冒険に出た。

その後、槍に持ち替えたために剣を使うことはなかつたが、息子がこの剣を持つて旅に出る姿を見ると自分の昔を思い出してしまう。息子の姿に誇りを感じるけれど、寂しさも胸の内から湧いてくる。笑つて気持ちをこまかそつとするけれど、剣に触れる手は震えていた。

「……いいか、手紙は必ずだしてくれよ。何も書くことが浮かばなくともいい。おまえが無事なのがわかればいいからな」

「もちろん書くよ。町に着いたら絶対に出す」

「それと早く仲間を見つけるんだぞ。一人でできる」となんてほんの少しあんなことないんだ。わかつたな

「わかつてるよ、父さん」

前から同じことを繰り返す父を安心させるようにティオは溜息をついてしまつ。

自分の言葉を甘く受け止めている息子にもつと言つて聞かせてやりたいが、あまりしつこく言つのも悪い気がするのでやめておくことにした。

「まあ、そのうちわかつてくるか……」

両親が一步下がると、変わるように村長とジャックたちが彼を囲つ。村長は年老いてまがつた腰をなんとか伸ばして自分より背の高いティオの頭に触れる。

「おまえの祖父も父もこの村を出て行つて、この村に戻ってきた。

「おまえもちゃんとここに戻つてくるんだぞ」

「もちろん戻つてくるよ」

次にジャックたちが次々に声をかけていく。

「帰つたらいろんな話聞かせろよ！ 土産は忘れるなよ」

「ぜつたい帰つてきてね！ 私待つてるからね！ 私真珠のネックレスがいい！」

「……カラウラ産の牛が食いたい」

「うん、僕は冒険に出るんだからね。旅行に行くんじゃないんだからね」

仲間たちのちやかしについ笑つてしまつ。

本当はもつと喋つていたいけれど、このまま喋ついたら決心が鈍つてしまつ。

意を決する様に腰に帯びた剣にそつと触れる。

「それじゃ、そろそろ行くよ」

そう言つた瞬間、楽しそうに話していたジャックたちは黙つてしまつた。

が、寂しさは隠しきれていないけど笑顔でティオを抱きしめる。

一人だけまだ幼いカーニだけが泣きそうになりながらティオの服を掴む。

ティオはしゃがんでカーニの頭を撫でる。

「絶対帰つてきてね……」

「うん、いい子で待つてね」

それから拳を当てて村に伝わる絶対の約束を交わした。

村長は両の手を合わして神に祈りをささげる。

「神よ、この子に厳しい試練と深い慈悲を与えたまえ

そして一人一人と抱きしめあつた後、セフィイラとガルドラに向き直る。

「行つてきます！」

「ああ、行つてこい！」

「こつてらつしゃい。風邪ひかないでね

両親と仲間たちに見送られて、少年の冒険が始まった。

第一話 旅立ち（後書き）

はい、主人公が旅に出ました。

これからいろいろなことに巻き込まれながら成長していきます。

他の小説とは違った展開になるよう考えています。

特にチート＆ハーレム、おまえらの出番ねえから！

……ごめんね、使いこなす自信がないんだ。

と、言うことでアドバイス、指摘などがありましたらよろしくお願
いします。

いきなりバトル！（前書き）

はい、いきなり戦闘に入ります。
拙い文章ですが、人が死にますのでご注意ください。

いきなりバトル！

近い町までは徒歩だと一日はかかる。

しかし視界の広い草原を歩いていくだけなので急がずに歩いていく。幸い、草原にモンスターは出ることはないし、天気も丸々太った雲が流れている快晴だ。

だから道端に生えている薬草を摘みながらのんびり歩こうと想えていた。

薬草は何種類もあつて組み合わせ方で傷に利く薬になつたり、腹痛に利く薬になる。

夢中になつて摘んでいると背後から声をかけられた。

「おい、あんた。こんなところでなにやつてんだい？」

振り返ると、幌馬車にのつた商人がティオを見下ろしていた。

「ああ、町に行こうと思ってたんですが、薬草がたくさんあつたんで摘んでいたんです」

「へえ、そうなのか。町に言づんなら乗せて行つてやろうつか？」

「いいんですね？」

思わず申し出にティオはパアッと顔を輝かす。

格好を見て冒険者、それも旅の常識もまだ知らない新米だと読んだ商人はティオの子供らしい反応に、つい笑ってしまった。

「構わんよ。さつきも一人拾つたんだ。一人ぐらいどうしたことないさ」

「ありがとうございます」

軽く頭を下げたティオは商人に駄賃を払つて後ろの荷台に乗る。

木箱が場所をほとんど占めているが、なんとか空いている場所を探して座る。

ティオと向かい合つように一人の男女が座つていた。

軽く挨拶をすれば眼鏡をかけた黒髪の女性がにっこり笑つて挨拶を返してくれた。

「こんにちわ、君も冒険者かな？」

「はい、あー、えつと、今日村を出たばっかなんです」

「へー、そうなんだ。いーねー。若いねー。」

そう言って人懐っこい笑みを浮かべる。

「私たちも似たようなもんだからわからないことがあつたら聞いてね」

歳は20代後半だと思つたが、ふにやつと笑うと幼く見えた。

「あ、そうだ、紹介をしてなかつたね。私はセレハート。彼はトル。無口だけど私のパートナーよ」

「ティオです。よろしくお願ひします」

セレハートは魔術師らしく、黒の皮鎧の上に紫色のマントを羽織つていて透明な結晶がはまつた杖を持っている。

そしてトルはティオより2、3ほど歳が上の青年で褐色肌でとげした灰色の髪が無造作に伸びている。

胸当てと肘と膝を護るプロテクター、鉄鋼が仕込まれたグローブと動きやすさを重視した軽装備。

己の体を武器とする拳闘士のようだ。

二人の会話に加わろうともせず、紹介されたときも頷いただけだ。

馬車の振動に揺られながらティオはセレハートから冒険者としてのアドバイスを聞いていた。

冒険者は仕事を斡旋するギルドでクエスト、魔物討伐や物資調達をする際は最低でも一人1組み出なければいけないこと。

組んだ仲間の短所長所を把握し、戦闘での役割分担をつけておくこと。

また散策するときもメンバーの配置に気を配らなければいけないことなどなど、セレハートは父から教えてもらわなかつたことを丁寧に説明してくれた。

「一番やつちやいけないのは単独行動に出ると道具をそろえておかないことね。

魔物は弱ってる者や逸れた者を狙うことが多いし、一人で魔物を相手にするのは自殺するようなものなの。それに道具を揃えなかつたためにベテランが毒に侵されて死ぬこともよくあることよ。

町の外で生き残るには最低でもこの一つは犯しちゃ駄目ね

「わかりました」

なんとかセレハートのアドバイスを聞き逃すまいと、書き慣れない文字でメモを取る。

その様子を見ていたセレハートはつい笑ってしまった。

「いやー、なんか久しごとに反応を返してくれる子がいると、ついたくさん喋っちゃうわねー。

この子、見ての通り無口だから寂しかったのよ」

そう言つてセレハートは隣に座るトールを肘で小突く。

「あんたも先輩としてなにかアドバイスしなさいよー

「……敵」

「え？」

強めに小突かれても無反応だったトールが急に立ち上がる。ティオも釣られて外を見てみれば、馬車に向かつてくる影が複数見えた。

まだ遠すぎるために姿ははつきり見えないけれど、どんどん近づいてきている。

セレハートが帆をめくつて手綱を操つている商人に呼びかける。

「商人さん、ちょっと問題が起きたみたいよ

「問題？」

問題という発言に商人は不安そうにセレハートの顔を見る。

「うしろから人が来てるんだけどさ、たぶん盗賊だね

「なんだって！？ ああ、くそ！」

商人は罵声を吐くと馬の尻を叩いて拍車をかけようとする。

しかし荷を満載した馬車が出せる速さも限度があり、追いかけてくる集団と距離がぐんぐん縮まる。

セレハートは帆からわざかに顔を覗かせて、追いかけてくる集団の数と武装を把握する。

「数は8人、弓は持たずに剣か斧を持つてるね。よし、ティオ君は二人ぐらい任せてもいい？」

ティオは鞘から剣を引き抜いて、深呼吸を一度してから頷いた。

「大丈夫です。やれます！」

「人は殺せる？」

セレハートがあっけらかんと聞いてきたために言葉に詰まってしまつたが、気を取り直して頷いた。

「……人を殺したことはあります」

「なら大丈夫だね。トール、あなたもよろしくね」

声をかけられたトールは軽く頷くと、強張った体をほぐそつと狭い馬車の中で背伸びをする。

今から戦闘に入るのに緊張していないトールに、ティオは驚きを隠せなかつた。

馬に乗つた男たちは皮鎧を着こみ、手入れをしていない剣や斧で武装している。

盗賊たちはあつという間に馬車に追いついて囮みこんでしまつた。

その一人が腰帯からナイフを抜いて馬車に投げつける。

「死にたくないりや止まれ！ 大人しくしてりや命はとらねえ！」

商人は恐怖で顔を強張らせて、盗賊の言うとおりに馬車のスピードを落とした。

馬から降りた

盗賊たちは4人が馬車を囮んで残りが後ろに回り込んで積み込まれた荷を覗き込もうとした。

一人が近づいて帆をめくろうと手を伸ばす。

が、盗賊がめくる前にティオとトールが飛び出して襲い掛かる。

飛び出したティオは目の前にいた盗賊を地面に押し倒した。

そのまま相手に反応を取る間も与えず、倒そうとしたが、剣を持つ腕を掴まれて阻まれてしまう。

剣を胸に突き刺そうと力を入れるけれど、盗賊も刺されてたまるかと必死に抵抗する。

なので剣で刺すことを諦めて、盗賊の顔を殴りつける。

盗賊は片腕で顔を庇おうとしたが、容赦なく3回殴つて気絶させた。

「このやうう！」

仲間が斧を振り上げてティオに襲い掛かる。

振り下ろされる前に横に転がって避けるが、次に繰り出された蹴りを顔に受けてしまった。

「立て、クソ野郎。鱈切りにして喰つてや……！」

喚きながらティオに近づこうとした盗賊が白目を向いて前のめりに倒れる。

男の急所を蹴りつぶしたトールは泡を吹いて倒れようとした盗賊の首に腕をからめて捻る。

首が妙な方向に曲がった盗賊はその場に崩れ落ちた。

「早く立て」

頭を押さえているティオに手を貸して起らすと、蹴られた場所を素早くチェックする。

「傷は浅い。血が派手に出てるだけ」

「あ、ありがとう」やひこます

残っていた盗賊は遠巻きに一人を囲んではいるが、自分から斬りかかるうとしない。

トールのそばには今もう一ヶ殺されたものと別のもう一つ死体が転がっていた。

その盗賊は顔面に蹴りを入れられると、起きる間もなくブ

ーツの裏で首を小枝のように折つてしまつた。

仲間が瞬く間に3人も失つたために、彼らの間に狩られる側の恐怖

が生まれる。

互いに目配せをして先に仕掛けるように催すが、誰も自分から動こうとしない。

「冒険者がいたのか、ちくしょう！　どけ、俺がやる！」

リーダーが毒づきながら剣を構え、ビビッている部下を叱咤する。トールを恐れて動かなかつた部下たちも武器を構えて3人がトールに、一人だけがティオと対峙する

一番の脅威となるトールを数で片付けようと考えだらう。だが、脅威が一人だけだと早とちりしたためにその作戦も失敗することになった。

今にも斬りかかるうとした一人の回りにパチパチ火花が散ったかと思つたら、いきなり電気が走つて感電させた。

いきなりの出来事にティオも含めて啞然としてしまつた。

感電した二人は死んでおらず呼吸しているけれど、陸に打ち上げられた魚のようにピクピク動くだけだ。

魔法を唱えたセレハートは馬車の上で王立ちして盗賊たちを睨み付ける。

「はいはい、あなたたちに勝ち目はないわよ。逃げるなら見逃してあげるから、さつさと諦めなさい」

小馬鹿にした口調に盗賊たちはカツとなつて前に出ようとしたが、セレハートの前にトールが立ちはだかると怯えて後ろに後ずさる。リーダーは完全に飲まれている部下に舌打ちを打つ。

「それとも皆殺しがいいかしら？　あなたちぐらいなら一分も時間はかかるないわよ」

しばらくセレハートとトールを交互に見ながら考えていたが、やがて剣を鞘におさめて両手を上げた。

「……チ、わかつた。俺たちの負けだ」

そう言って部下を叱咤して馬に跨る陽に命令する。

「今日は運が悪かった。あんたたちみたいなベランの冒険者どぶ

つかつちまつなんてな

「あら、生きて帰れるのよ？ 運がいいと考えなさいよ」

「言つてろ」

リーダーは肩をすくめると、未だ剣を構えているティオを見て鼻を鳴らす。

「武器はしまいな、ルーキー。おまえらの勝ちだ。いつまでもガチになつてんじやねえよ

「な、なんだと！」

敵に馬鹿にされて顔を赤くしたティオがリーダーに掴みかかるうとしたが、軽く腕をひねあげられて返り討ちにされてしまう。

「あいたたたつ！」

「まだまだ素人に毛が生えた程度だが、ま、頑張ればいい線行きそ

うだな」

そう言つてティオを突き飛ばすと自分の馬のもとへ歩き出さうとした。

怒りも収まらないティオは去ろうとする盗賊の背中を睨み付ける。

「仲間が殺されたのにサバサバしてましたね……」

「うーん、盗賊稼業もつらいからね。そういうことには慣れちやつたんじゃない？」

「慣れるんですか？」

「慣れるしかないの

突然耳障りな羽音が鼓膜を打つ。

ティオが驚いて見上げれば、人よりも2匹大きな蜻蛉が頭上を通り過ぎるところだった

しかもその蜻蛉は長い鎌状の前足で鎧を着こんだ人間を運んでいた。去ろうとしていた盗賊たちも驚いて声を上げる。

セレハートが長い溜息をついて額に手を当てる。

「勘弁してよー。なーんでこんな所でアイアンドールに見つかるかなー」

2匹の蜻蛉はティオたちの頭上を飛び過ぎた後、ゆっくり旋回して戻つてこようとしていた。

トルはなにが起きているのか理解できちゃう茫然としているティオの肩を叩いた。

「構えろ、死ぬぞ」

どうやら本当の闘いはこれからようだ。

いきなりバトル！（後書き）

はい、盗賊との戦いは終了しましたが、次はもっとやばそうなのと
戦います。

VSアイアンドール

「先手必勝！一撃必中！敵を粉碎しなさい、ファイアショット！」

セレハートの周囲から複数の火の玉が生まれると、向かってくる一匹の蜻蛉に勢いよく飛んで行つた。

蜻蛉は自分より大きい鎧を持つてゐるのに、急激な旋回をかけて回避行動をとる。

一手に分かれた蜻蛉の間を火の玉が過ぎていく。
しかし、火の玉はそのまま通り過ぎて消えずに、避けた蜻蛉の後をしつこく追いかける。

さらに正面からも追加の火の玉が蜻蛉を狙う。
1匹はジクザクに動きながら鎧の足が地面につきそうになるほどの中空を飛んで逃れたが、もう1匹はスピードを出して振り切ろうとしたが無理だった。

1発目に片翼をもぎとられクルクル回つて落ちようとしたところで2発目、3発目が命中。

空中で黒焦げになつた蜻蛉の破片が飛び散る。
運ばれていた鎧は投げ出されて地面に落ちて行つた。

蜻蛉を1日仕留めた瞬間に見ていた盗賊たちが歓声を上げる。

「なに騒いでるの！まだ1匹いるわよ！」

トルルが鎧の落ちて行つた場所に向かつて走り出した。

セレハートが厳しい声で叱咤しながら掌から雷を撃ちだす。

雷は真っ直ぐに飛んでいた蜻蛉の体を貫き、その体を爆散させた。
しかし、蜻蛉が運んでいた鎧はすでに地面に落下していく盗賊のリーダーの前に大きな音を立てて着地した。

間近で見る鎧の迫力に圧せられたティオは唾を飲み込む。

鎧は2メートルを超える鎧は黒を基調としていて、真っ白な骨が肩や胸についている。

手には盗賊たちが持っているものよりも破壊力を誇るメイス。

反対の手に持つ縦長の鋼鉄の盾と兜の側頭部には不気味な目が浮かんだ太陽が描かれ、顔を完全に覆う鎧の試合のために空いた隙間から赤い光が漏れている。

初めて重装甲の鎧をみたティオはその迫力に圧されて後ずさる。なんというか、人間らしさを感じられなかつた。

「ぼうつとしてないで！ 来るわよ！」

アイアンドールがそばにいたリーダーに襲い掛かる。

乗っていた馬の首にメイスが半ばまで食い込み、血を吹き出しながら倒れる。

「俺の馬が！ このお！」

落馬したリーダーは転がるようアイアンドールの懷に入り、起き上がり様に鎧の隙間がある腹に剣を突き刺した。

両手に力を込めて柄本まで突き刺したリーダーは勝利を確信して笑みを浮かべたが、その顔面に盾が叩きつけられる。

リーダーの顔が潰れて口から折れた歯と血を吐き出す。

そして無慈悲に薙ぎ払ったメイスを受けて頭がひしゃげ、血と潰れた脳症が勢いよく吹き出す。

明らかに死んでいるのにメイスはもう一度振り下ろされ、リーダーの頭は弾けて下顎を残して無くなつた。

リーダーがあっけなく殺されたのを見て残された盗賊たちは悲鳴を上げて逃げ出した。

地面を転がるリーダーの死体を目で追いかけたティオはゆっくりと、次の獲物を自分に決めて近づいてくるアイアンドールを見る。

頭の中が真っ白になつてどうすればいいのかわからない。

呼吸ができなくて目の前が真っ暗になりそうだ。

人間があんな風に壊れるのを初めて見たティオは、ただ、怖くて涙を流して立ち尽くすしかなかつた。

二人目を破壊しようとしたアイアンドールに雷が撃ちこまれる。前にかざした盾で防いだが、その威力に圧されて巨体がうしろにころげる。

ティオの頬が雷をかすめて皮膚が焦げる。

その痛みに意識が戻つて我に返つた。

「魔物を前に何やつてるの！ 男の子でしょ？ しつかりしなさい！」

もう一度、セレハートの掌から生まれた雷がアイアンドールに撃ちこまれるが、また盾に阻まれてしまつ。

アイアンドールが縦を前にメイスをティオの胸口掛けで突き出す。体が固まっていたティオは横に移動してメイスを避けたが、体にぶつかつて弾き飛ばされた。

アイアンドールはそのまま勢いをつけて肩からばしゃにぶつかる。

「うわあ！」

馬車が揺れて驚いた馬が鳴いて走り出す。

身構えていなかつた商人が驚いて転がり落ち、セレハートは着地するなり素早くアイアンドールから距離を取つた。

「大丈夫？」

「は、はい、大丈夫です……」

立ち上がつたティオは急いで服の裾で涙を拭つた。

「すいません、馬鹿やつてました……」

「まあ、そこは冒険者成り立てつてことで見逃してあげる。けど、いい？ あいつはあなたが相手をするのよ」

ティオの顔が緊張で強張る。

「トールが駆けつけるまで耐えたら私たちの勝てるわ。

だから、それまであなたに耐えてほしいの。もちろん私も援護してあげる。

出来る……？

「……やります！」

「よし、あいつの弱点は顔だから、そこを狙うんだよ」

「はい！」

力強く頷いたティオは深呼吸をしてから、アイアンドールに向かって走り出した。

ゆっくり動いてる馬車によじ登つて逃げる商人を捕まえようとしていたアイアンドールの背を斬りつける。

刃が鎧の表面を削つて火花を散らす。

振り返りざまにメイスを振り回してティオを叩き潰そうとしたが、素早く下がったために空振つた。

追いかけようとしたが足元に火の玉が爆発して、衝撃を受けきれずに巨体が膝をついた。

「今よ！」

セレハートの声にティオは慌てて追撃しようとしたが、アイアンドールがメイスを振り回すために近づけない。

「私の魔法に合わせて！」

「はい！」

アイアンドールが盾を突き出して押し倒そうとする。

避けられないと判断したティオは両手をクロスして受け止める。

体重差に負けてティオの体が押されるが、歯を食いしばつて耐える。

セレハートが再び援護しようと、今度はアイアンドールの頭上に人の頭よりも大きな氷の塊を精製する。

アイアンドールは咄嗟に一步下がつて盾を翳して受け止めた。

盾にぶつかつた氷が碎けて飛び散る。

いきなり盾をずらされたためによろけてアイアンドールの体にぶつかってしまった。

頭をぶつけて涙が浮かんだが体が密着した今、メイスはその威力を発揮できない。

剣を突き出して首に突き刺した。

「「」の「」…」

アイアンドールが盾を手放してティオの頭を掴んで引きはがそうとする。

頭が握り潰されるんじゃないかと思うほどの握力だが、剣を握り直してもう一度首を刺した。

が、いくら首を刺してもアイアンドールは倒れず、密着するティオを引きはがそうと今度はメイスの柄を頭に押し付ける。

セレハートが叫ぶ。

「頭だつて！ 首に刺しても意味ないつてば…」

「え？」

その時になつてやつとティオも違和感に気が付いた。

昔感じた肉を突き破る感触がせず、鉄と鉄が擦れる音しかしない。そして刺している場所からは血が流れず、代わりに黒い煙が漏れるばかり。

「え？ エ？ エエ！？」

驚いたティオは目を丸くして離れようとしたが、力が抜けたために突き飛ばされてしまった。

尻餅をついたティオは動搖しながらもすぐに立ち上がらうとしたが、アイアンドールの足が腹にめり込む。

「つー？」

皮鎧でも殺しきれない衝撃が腹を襲い、小柄な体が地面を転がる。なんとか地面に手をついて起き上がるうとしたけれど、我慢できずに胃の中のものを地面にぶちまける。

父との訓練でも感じたこともない痛みに視界が霞む。

早く構えないと死ぬのに、足元がふらついて剣が構えられない。

セレハートがティオに近づけさせまいと魔法を擊つけれど、アイアンドールは盾で防護しながら彼に近づいてくる。

「くそ、こんなところで終わってたまるか……」

荒い呼吸を繰り返し、近づいてくるアイアンドールを睨み付ける。

アイアンドールが人間を殺そうとメイスを振り上げる。

鎧が掴まれてアイアンドールの巨体がうしろに引っ張られる。そしてそのまま足を引っかけられて、仰向けに倒れてしまった。自分より大きいなアイアンドールを引きずり倒したトールはティオの状態を素早く確かめる。

「肋骨が折れてる。マスターに直してもらえ」

それだけ言うとアイアンドールを相手にするべく向き合つ。

セレハートはティオを馬車のそばに引っ張つる。

その時、トールに「カツ」と笑いかけた。

「トール、新人いじめする悪い子を懲らしめてあげなさい」

「了解」

勢いをつけて起き上がったアイアンドールが新しい人間を標的に選んだ。

真っ直ぐにトールに殴りかかるのではなく、そばに落ちていた盾を掴んで投擲する。

もちろん受け止めずにしゃがみ込んで避けたけれど、それを読んでいたアイアンドールはすぐに距離を詰めてメイスを振り下ろす。トールはしゃがんだ姿勢、陸上選手がスタートダッシュから前に飛び出して両の拳を腹に叩き込んだ。

巨体が体をくの字に曲げてうしろによろめく。

さらに弧を描いたブーツの踵が脇腹を強打、鎧が甲高い音を立てて凹む。

治療を受けていたティオは信じられないものを見て、空いた口を閉じることができなかつた。

その様がおかしくってセレハートはつい笑ってしまった。

「そりや、驚くよね。なんてつたつてうちの子は特別だもん

その間にもトールは確実にアイアンドールの体を傷つけていく。大きく振り回されるメイスをわずかに体をすらして避けながら、振

り切ったタイミングを狙つて拳を叩き込んでいく。

見ている間にもアイアンドールの鎧にヒビや凹みが生まれ、そこから黒い煙が漏れてくる。

「と。トールさんも凄いんですけど、あ、あれもなんなんですか？」
「あれはねえ、私もわかんないけど、誰かが作り出した魔物の一つみたいよ

人間だけを殺すようにプログラムされた殺人兵器ってところかしら」「魔物……！？」

自分が相手をしていたのがモンスターよりも危険な魔物だったことに今更知つて、もう何度もかわからぬ驚きと自分が生き残れた幸運が信じられなかつた。

「ほら、そろそろ終わるね」

振り下ろしたメイスがトールを掠めることなく地面に刺さる。
回り込んだトールは相手の膝裏に蹴りを入れて跪かせる。
そして狙いやくなつた顔に体重を乗せた掌底を叩き込んだ。
バイザーガヒシャゲて大量の黒い煙が外に流れ出す。
トールは躊躇せずに煙が溢れ続ける兜の中に手を突っ込んでなにかを引っこ抜く。

抜いた瞬間、アイアンドールの体中から煙が一気に噴き出し、次には鎧が粉々に碎けて地面に落ちる前にスウッと消えた。

敵を片づけたトールは引っこ抜いたものをセレハートに渡す。

「はい、お疲れ様」

それは真つ赤に輝く石だつた。

セレハートは上にかざしてティオに見せる。

「これがアイアンドールのコア。これを壊すか鎧から剥がせば倒せ
るわ」

「へえ、そなんだ」

ティオはまじまじとその石を眺める。

最初はただの綺麗な石かと思つたけれど、よく見れば中心に黒い靄が見えた。

「これを冒険者ギルドに渡せばお金がもらえるよ
そつ言つて赤い石をティオの手に握らせる。

「え、僕は何もやつてな……」

「「いいの、いいの。頑張つた」」褒美に取つておきなさい」

ティオは断ろうとしたけれど、セレハートは受け取らずにティオの頭をわしや話者と撫でる。

「ほら、治療も終わったことだし出発しよう。おじさん、馬車は大丈夫？」

「あ、ああ、後ろ側が壊れてるけど、何とか走れるだらつ」

「それじゃあ、すぐに行きますか。少年も疲れてるしね」

荷台に座つたティオは自分の手が震えていることに気が付いた。
いや、手だけじゃなくて体全体が震えていた。

それに頭の中では盗賊のリーダーが殺された光景や、メイスを振りかざして迫るアイアンドールがグルグル再生されている。
ギュッと膝を抱えて震えを抑えようとするけれど、収まるといろく余計にひどくなる。

「怖かつたんだね」

ティオの頭をセレハートの手が優しく触れる。

「町に着いたら起こしてあげるから、今はゆっくり休みなさい」

「子供扱いしないでください……」

「ふふ、そうだね。君も冒険者になるんだもんね」

シープル。ティオの前に小さな羊が何匹も生まれる。
羊たちは淡い水色の光を発しながらティオの回りを楽しそうに飛び

回る。

ティオは羊を視線で追いかけていたが、やがて瞼が重くなり、ついには眠り込んでしまった。

「それじゃ、ゆっくりお休みなさい」
ティオが完全に眠り込んだのを確認したセレハートは自分のマント
をかけた。

VSアイアンドール（後書き）

戦闘終了です。

いきなりころされかけた主人公、これから冒険者として大丈夫だろうか？

モンスター

腹が減つたら人も襲う狂暴な動物。

群れで村を襲うことがあり、冒険者ギルドでも討伐依頼が来る。狼や熊でも種類によつてはモンスターに区別される。

魔物

自然の理から外れた外道のもの。

モンスターよりも危険な存在で、討伐には冒険者だけでなく軍隊や騎士団も出動するほど。

例としてはゾンビ、リッチ、ダークエルフなどなど。

人と同じように理性を持ち、独自の文化をもつ魔族とは違つ。

街に到着！（前書き）

今回は会話だけです。

そらつと読んでいただけるとありがたいです。

街に到着！

馬車はアイアンドールの体当たりを受けたために、路面の衝撃がひどくなっている。

けれど魔法を掛けられたティオは深い眠りに落ちていて目覚めない。だから体を揺すられて起こされたときも、ぼーっとしていて起こした商人の顔をじっと見ていていただけだった。

「ほら、坊や。門についたぜ」

「え、あ、ついた……？」

寝ぼけ眼でキヨロキヨロ首を動かすけれど、もちろん馬車の中からじゃ外の様子はわからない。

その様子がおかしくて商人は吹いてしまった。

「なにやってんだよ。ほら、早く受付に行ってきた」

頭が覚醒していない状態で馬車を降りれば、目の前に馬車2台が並んで通れる大きな門がたつていた。

「や、おはよう」

大門の脇にある小屋の前でセレハートとトールが立っていた。

セレハートは肩掛け鞄に杖を持っているが、トールは背中に大きなリュックを背負い、さらに2つの袋を肩に下げている。

「おはようございます」

「よく眠れたみたいだけど調子は大丈夫？」

「はい、もう大丈夫です。トールさんも助けてくれてありがとうございました」

トールは軽く首を横に振る。

「大丈夫ならいい」

「セレハートさん、書類の申請が終わりましたよ」

そこへ小屋から門番が出て来てセレハートたちに町に入る許可が降りる。

「許可証はすべて確認しましたので、荷物は全て運んで大丈夫ですよ」

「そう、ありがとうね」

門番は一通りセレハートと会話をして書類を渡すと、ティオに早く中に入るようになつて小屋に戻った。

「それじゃ、私たちはもう行くね」

「はい、いろいろありがとうございました」

「ふふ、どういたしまして」

セレハートはポケットから一枚の紙を取り出してティオに渡す。見ればアルクエン研究所と住所が書かれていた。

「そこで私は働いているの。冒険者ギルドでクエストをこなしたら研究所において」

ここでもクエストは受けられるよ

「わかりました」

「それじゃ、またね」

セレハートとトールは別れを告げて　　トールは軽く手を振るだけ街の奥へと消えていった。

小屋に入れば一人の衛兵が座つて書類を書いていた。
その内の眼鏡をかけたほうがティオに手招きする。

「街に来たのは初めてか？」

「いえ、來たことがあります」

「そうか、なら説明はいらないな。この紙の質問事項を書いてくれ
そう言つて紙と鉛筆を渡される。

ティオはすぐに名前や村の出身を埋めていく。
職業の欄に進んだとき、まだ冒険者に登録していないのに書いていいのか迷ってしまった。

鉛筆が止まつたティオの様子を不思議に思った衛兵が髪を覗き込む。

「どうした？」

「あ、いえ、冒険者になるために町に来たから、なんて書こうかな

「って思つて」

「ああ、それなら冒険者つて書けばいいよ。そうか、冒険者になるのか」「

ティオの体つきを見た衛兵は心配そうに顔を曇らせた。

「それにしても、早すぎないか？　まだ子供じやないか？」

「……僕は成人します」

ティオの言葉に衛兵は目を丸くする。

この国では15歳になれば成人として扱われる。

が、目の前の少年はよく見ても13か14ぐらいに見えなかつた。信じられずにもう一度ティオを見れば、不機嫌そうな顔で見返された。

「そ、そつか、すまなかつたな。ええとほかにわからないことはないか？」

「よし、それならもう行つていい。冒険者ギルドは4番地区に行けばすぐに見つかるよ」

「わかりました」

まだ子供扱いされたことに機嫌を悪くしていたティオはムスッとしたまま小屋を出て行つた。

外では商人がティオのことを見守つていた。

「おう、少年、受け付けは終わつたな」

「ええ、終わりました」

子供扱いされたことにまだ怒りを感じていたが、商人に愚痴ることもできないので我慢する。

商人もティオが不機嫌になつているのに気付いたが、ここはあえて触れなかつた。

「そつか、さつき嬢ちゃんから聞いたけど、冒険者になるんだつて？

なら5番地区にあるアルバージつて名前の鍛冶屋に行きな。

店は小さいで頑固な親父がやつてるけど、腕は確かだ」

「わかりました。ここまで乗せてくれてありがとう」

「なあに、あんたが頑張ってくれたから商品も無事だつたんだ。礼を言つのはこつちだよ」

商人も馬の尻に鞭を当てて出発した。

「いい冒険者になるんだぞ！ 頑張つたら商品を安く売つてやるからな！」

そう言つて酒の入つた瓶をティオに投げ渡す。

「うん、僕も頑張るよ！」

馬車が町の奥に消えていくのを見届けた後、ティオも冒険者ギルドへ歩き出した。

ポルトロの街は9つの地区に分けられている。

市役所や警察署、貴族の所有する建物が多い1番地区と7番地区。店を構える商人や村から野菜を並べる村人が商いをする2番地区と3番地区。

冒険者、ギルドがある4番地区と5番地区は冒険者が利用する武具や旅の道具が並んでいて、旅人や傭兵も利用している。

あと6番、8番、9番は市民が住んでいる。

地区によつて階級層が変わり、特に8番地区は危険で観光客は近づかないように注意されている。

6番地国も警察署はあるがこちらはモンスター討伐のために、1番地区よりも重武装な部隊が待機している。

門のそばにあつた案内図を見てみると、観光客が立ち寄る建物の場所が示されている。

ティオは村で採れた野菜を売る時にしか来たことがないため、いろんなところを見て回りたい気持ちがあつた。

しかし遊びに来たんじゃないと自分に言い聞かして真つ直ぐ冒険者ギルドに向かうことにした。

「あ、あれなんだろ？ 時計塔？ おおきいなあ」

遠くに観光名所として有名な時計塔を見つけてしまつたティオは興

味に引かれるまま歩く向きを変えてしまつ。

彼が冒険者ギルドに着いたのは時計塔と周辺の店を見て回った2時間後だつた。

街に到着！（後書き）

も、盛り上がりねえ……（汗）

お客様の中に飽きさせない文章の書き方を教えてくださる方はいらっしゃいませんか！？

マスケット銃は戦闘のない文章を書くのが苦手なんです！ 誰かいらっしゃいませんかー！？

冒険者ギルド（前書き）

やつと冒険者ギルドに到着しました。
相変わらず会話ばかりです。

「……」「」

ティオは目の前の屋敷を見上げる。

他の民家よりも大きく威圧的な3階建てで石の壁に囲まれている。万が一の時に籠城できるように高い壁に囲まれ、侵入を防ぐために窓は小さい。

そして2階、3階に突き出したバルコニーは射手が身を隠せるようにしており、屋根にも撃てるように戸がついている。さらにいくつもの秘密があるがティオは気付くわけもなく、堂々とした建物の造りに感心するばかりだ。

「よし、行くか！」

期待に胸を膨らませて、ティオは扉を開けた。

大小のテーブルについて何か話し合っていた冒険者たちが扉の開く音に釣られて振り返る。

一目で場数を踏んだと分かる冒険者たちの視線に晒されて、ティオは一瞬身を強張らせたが気を引き締める。

受け付けは奥のカウンター。そこを目指して冒険者たちの間を進んでいく。

ティオを值踏みするように見ていた冒険者たちは懐かしむように笑みを零す。

「へえ、新人だな」

「大丈夫なの？ まだ子供じゃない」

「かわいい子ね。お兄さんがいろいろと教えてあげたいわ」

冒険者たちのからかい交じりの言葉 粘着質な視線も感じるは無視する。

手前のカウンターにいる女性スタッフに声をかける。

「はい、こちらしゃいませ」

「すいません、冒険者の登録をしたいんですね」

「冒険者志望ですね。では、こちらの書類に記入をお願いします」

そう言つて渡された紙は門前の小屋で書いたものと似ていた。

ティオはすぐに埋めて、スタッフに渡す。

スタッフはさつと目を通して書き落としか、書き間違いがないかをチェックする。

そして間違いないことを確かめる。

「宿泊はどうしますか？」

「あ、宿をお願いします」

宿は冒険者ギルドが用意した宿泊施設で、一般的な宿屋よりも安い金で泊まれる。

また、紙が渡されたので今度はサインと利用期間を記入する。

とりあえずは3ヶ月間利用することにして宿代は3回に分けて払うこととした。

ちなみに宿は1月」との契約で、1月に払う金額は一万四千エルク。1日八百エルク程度の計算で、一回の食事が三百エルクだから安い値段だと思う。

そして冒険者登録するには五百エルク払う。

「では、登録費と宿の一ヶ月料金として一万四千五百円になります」事前に父からいくらかかるか教えてもらつていたティオは財布とは別に封筒からお金を払う。

この金は冒険者になるためにこつこつ貯めてきた物で、このために貯めてきたとはいえ、封筒の中が一気に減るのは寂しい。

が、このために貯めてきたんだから躊躇うなー、と心の中で自分を叱咤する。

けれど気持ちが表情に出ていたために、スタッフはお金に伸ばした手を止めてしまった。

捨てられた子犬のように見えてしまったが、心を鬼にして差し出されたお金を数えていく。

「では、登録はこれで終了します。次にギルドでのクエストの受け方について説明しますか?」

「お願いします」

スタッフはわかりましたと頷くと、書類を同僚に渡して手帳ほどの大きさの冊子を取り出した。

その冊子を机の上に開いてティオに見せる。

「冒険者の登録ができましたので今日からクエストが受けられるようになります。

クエストはあちらに張つてあるボードに張つてありますので、受けたいものを取つて受け付けに持つてください」

そう言つて脇の壁にあるボードを指さす。

そこには大きさがばらばらの紙がボードを埋め尽くしていく、冒険者たちが受けるクエストを選別している。

「過去に狩つたモンスターから受けられるクエストは判断されます。ですので、最初は受けられるものは限られます、冊子の裏側に書いてありますモンスターを倒して行けば受けられるクエストは増えていますよ」

そう言つてページの後半を開くとモンスターの紹介が乗つていた。写真の横に名前と生息地、攻撃方法などが書いてあり、下には星が書いてある。

スタッフは最初のページに乗つている、星の数が1つしかないモンスターを指した。

「星の数は強さを表していますので、最初はこのモンスターを狩ることをお勧めします。

星が2つまでなら一人でも大丈夫ですが、3つのモンスターを狩るときは必ずチームを組んでください」

星2つのモンスターを眺めていたティオはその中からアイアンドルを見つけて、ついスタッフの説明を遮ってしまった。

「こいつって星2つなんですか！？」

「あら、アイアンドルを見たことあるの？」

「ええっと、ここに来る途中で襲われたんです……」

そう言いながらアイアンドルの説明を改めて見る。

アイアンドルは捕食も睡眠もとらない特異な魔物で、剣や槍のほかにマスケット銃を使用してくる。

唯一の弱点である頭に埋め込まれた石を破壊すると消えてしまつて、魔物の専門家も死亡解剖や生体実験をすることができるが、未だわからないことが多い魔物だそうだ。

「その時は一緒にいた人たちに助けてもらつたんです。とても僕一人で倒せる相手じゃなかつたです……」

「そうですか、でも一人で倒せない相手でもチームを組めば対処することができます。

今は冒険者としていろいろ学んでください。私も勉強しながらクエストをこなしてましたよ

「え？」

スタッフはくすっと笑つて胸に手を当てる。

「私も冒険者だつたんですね。だからなにがあつたら私に尋ねてくださいね」

「は、はい！」

「じゃあ、とりあえず最初に覚えておくべき所はこれぐらいです。

冊子は差し上げますので読んでおいてくださいね」

「ありがとうございました」

「お疲れ様でした。これから頑張つてね」

ティオが礼を言えば、にっこり笑つて手を振ってくれた。

「チームを組めば倒せる、かあ……」

クエストボード眺めながらスタッフが言つたことを思い返す。

父が言つていた意味を、まわかにんなに早く理解する」ことなるとは思わなかつた。

アイアンドールと戦つた時もセレハートがアドバイスをして魔法で助けてくれたから撲殺されず、この手で一矢報いることができた。いや、彼女がいたからこそ、逃げずに戦つことができた。

「早く仲間を作ろう……！」

冒険者ギルド（後書き）

初クエストはまだ先になりそうですね。

「田畠、終了（前書き）

村から町までの距離を一週間から一日に大幅に短くしました。

一田目、終了

「おい、少年。今からクエスト行くつもりか?」

後ろから声をかけられて振り返れば、顔に酷い火傷の跡が残る男が立っていた。

ベテランだらうか、傷ついた鎧や使いこまれた槍から、彼がベテランであることを物語つてる。

「はい、そうですけど……」

男はくいっと壁に掛けられてる時計を指さす。

釣られるよつに見れば、時計の長針は4時を指していた。

「もう日が暮れる。夜に1人で行くのは自殺するよつなものだ」

「あつ……」

せっかく初クエストに挑戦しようと思つていたけれど、先輩の警告を無視するわけにはいかない。

「まあ、初心者用のクエストはなくならないから、明日探せばいいだろ」「男は落ち込んだティオを励ますように肩を叩く。

「わかりました。明日クエストをを受けます」

「それがいい。朝に来ればお前さんみたいな新米も集まるから、パーティを組んでいけばいい。

あと最初に受けるクエストはこれがいいだろ」

そう言つて示したクエストはザブルピッグ3頭の討伐。

近隣の村から依頼されたもので、畑を荒らすモンスター3頭を対峙してほしいとのことだ。

報酬は1000エルク。

先程もらった冊子を開いてザブルピッグを見てみる。

一般的な豚よりも筋肉質で食欲旺盛。

基本的に食べるか寝ることしかしないが、攻撃されると突進していく

る。

「あ、これならなんとかなりそつ」

「だろ、でも3頭もいるから誰か誘つて行けばいい」「うん、これを受けます」

「それじゃ、頑張れよ」

もう言うことはないと判断した男は軽く手を振ると、一人の男女が座っているテーブルに座る。

仲間らしく男がティオを指さして何か話すと、二人は納得したのか頷いている。

「それじゃ、今日はどうしようかな……」

クエストを諦めたティオは空いた時間をどうしようか迷つたけど、武具屋に言つてないこと今さら気が付いた。

さらにここに来るまでにアイアンドールと戦つているのだから剣の状態も確かめないとまずい。

とんでもない状態でクエストを受けようとしていたことに、ティオは自分の悪露小朝に頭を抱え込みたくなった。

「と、とりあえず宿で荷物おいてこよう」

若干、この先やつていけるのか不安になりながら宿へ向かつことにした。

冒険者ギルドが経営する宿はギルドのすぐ裏にある。こちらも護りを重視した4階建ての建物だ。

中に入るとカウンターにいた体が丸くて顎鬚を生やした巨漢が愛想よく笑つて出迎えてくれた。

「さつきギルドから連絡があつて待つてたんだ。君が新米君だね」「えつとティオ・アルペノスです」

なんだか強面な人だなと思つてしまつていたので、見た目を裏切る愛想のいい態度にティオは面食らつてしまつた。

「私はクアンシーだ。ここを経営している者だよ」

そう言つてカウンターに数字が書かれた木の板がついた鍵を指し出す。

「これが君の部屋だ。2階の14号室。トイレは各階にあるし、大浴場が一回にあるから利用してくれ」

「わかりました」

「なにかわからない」とがあれば私に聞いてくれよ

「はい、ありがとうございます」

親切な人だなあと思いつながらトイオはクアンシーに礼を言つて階段を上る。

2階に上ると壁に1号室から15号室は左側に、16号室から30号室が右側に曲がるように書いてある。

右に曲がつて奥に行けば、トイオの持つている鍵の札と同じ数字が描かれたドアを見つけた。

畳3畳分ほどの部屋は小さな机が置いてあり、ハンモックが壁に掛けられている。

ただ寝る為だけの安い部屋。

父から聞いていたとはいえ、こ我が家が恋しくなる寂しさである。とりあえずは荷物を置いて外に出かける。

今日からここがトイオの活動拠点。

頑張つて気持ちいいベットの上で寝れるように頑張りう。トイオはそう心に決めた。

「お、さつそくエストに行くのかね？」

一階に下りて新聞を読んでいたクアンシーに鍵を渡す。

「いえ、夜になるから止めとけって人に言われたから、武具屋とか見に行つてきます」

「それがいい。ベテランでも夜の森とかに入つたら命がないからな」「それで聞きたいんですけど、5番地区にアルバージつ武具屋を知つてますか」

「アルバージ？……ああ、知ってるよ」

クアンシーは考えるように顎鬚をいじっていたが、思い出すとカウンターからメモを取り出すと簡単な地図を描いてティオに渡す。

「あそこは小さいけど掘り出し物が見つかるって話だ。けど、よくあんな店知ってるね」

「人から聞いたんですよ」

「ほう、そうなのか。まあ、用事をさしあと済まして帰つてくるんだよ」

「うん、ありがとう」

ティオはここでも子供扱いされるようで悲しくなったけど、善意で言つてくれると分かつてゐるからなんとも言えなかつた。

街はもうすぐ暗くなるためか買い物してゐる主婦や遊んでる子供の姿はない。

いや、この地区を利用する主婦はもともと少ない。

いくつか店を覗いてみると、長旅に耐えられる靴や丈夫な衣類を扱つてゐる。

衣類を扱う店では冒険者が持ち込んだ毛皮を渡して店員となにやら話し込んでいた。

遠くから見たのでよくわからなかつたが、その毛皮は折りたたまれた状態でも台にからはみ出すほど大きかつた。

道端でもシートを広げて干し肉や塩漬けした魚を売つていて、剣や槍を持つた冒険者が品定めしている。

その様子を眺めながら、クアンシーが書いてくれた地図の通りに歩いてアルバージと看板を下げる店についた。

アルバージは他の店よりも小さめで、ドアにかかっている交差する剣が掲かれた看板がドアの前に下がつてゐるだけだ。

中に入ればムツとした臭いが鼻を衝く。

店内には武具が乱雑しておかれていた。

壁に所狭し並べられてるだけでなく、詰め込まれた樽が置いてある。客に勝つてもらひ気がなく、持っている武器を置いただけのようだ。店の奥では小柄な老店主が研いでいた剣を置いて顔を上げると、入ってきたティオを品定めする様に素早く体を見る。

そして、何か引っかかるのかティオの顔を凝視する。

大量に並べられた武器に感動してキヨロキヨロ首を動かしてみていったティオは店主の鋭い視線に気づいて、無意識に姿勢を正した。

「新米か……。何の用だ」

「あつと、これの手入れをしてもらおうと思つてきました」

ティオは急いで腰から剣を抜いて店主に見せる。

店主は無言で受け取ると鞘から引き抜いて注意深く刃を確かめる。一瞬だけ唾に触れた手がとまつたが、すぐに手を動かす。

何も喋らないまま見る角度を変えたり、手で刃に触れていく。

そして時間をかけていく内にだんだん店主の顔が険しくなっていく。

「おい、なにか硬いものに刺しただろ?」

「え?」

「え?じゃない。刃の腹と切つ先が酷いことになつてる。

何も考えずにがむしゃらに突き刺しただろ」

そう言われてアイアンドールの首に何回も突き刺したことと思い出した。

今思い返して見れば、剣の切つ先が鎧の内部にぶつかっていたかもしれない。

「あ、そういえば……」

「少しあ大事に扱つてやりな。相当使つてるみたいだが、雑に扱えばすぐに駄目になる」

剣の状態を確かめ終えた店主は紙に何かを書き込んでいく。

「とりあえずこれは預かる。明日の朝には治しておいてやる。名前は?」

「ティオです。ティオ・アルペノスです」

「アルペノスね……」

店主は書き終えた注文書をティオに渡す。

「いま金に余裕はあるか?」

「え、あ、ちょっと待ってください……」

いきなり懐を聞かれて驚きながらポケットから財布を出す。村で牛泥棒を捕まえたり、小型のモンスター退治をして貯めた小遣いだが武具を買うほど金があるとは思わない。いや、ここで使つてしまつとこれから的生活が困つてしまつ可能性が高い。

言葉に迷つていると、店主はその様子で分かつたらしく鼻を鳴らした。

「そこにある丸い盾を手にとつてみな

店主が指さした物を言われたとおりに取つてみる。

飾り気のない盾は丸みを帯びた円形で、持ち手が手で固定できるようになつていてから重い一撃も受け止められそうだ。しかも小さいために腕の負担も少なく、つけた瞬間にティオはこの盾を気に入つた。

「それは3000ヘルクだが、2000ヘルクに負けてやるよ」

「え、いいんですか！？」

「まあ、冒険者になりたてのようだからな。少しごらうは負けといてやるよ」

「あ、でも……」

財布を見たティオは今まで喜んでいた表情から一遍、しょんぼりと悲しそうに俯く。

いきなりの変わり方に店主も動搖する。

「ど、どうした？」

「財布……1500ヘルクしかないです……」

そう言って財布の中身を店主に見せれば、確かに1500ヘルクしか入っていない。

店主としてはもっと金を入れてから来いと言つてやりたがつたが、ティオの寂しそうな顔を見ると怒鳴る気持ちが鈍つて強い待つた。もともと商売の才能がないし、金儲けにも興味がない店主は投げやりに手を振つた。

「わかった。1500にしといてやるよ」

「本当に！ ありがとうございます！」

また嬉しそうな笑顔に戻つて しつぽがついてたら千切れるほどパタパタ振つていただろう 1500エルクを払うと手に入れた盾を抱きしめる。

「それじゃあ、剣は明日の朝に受け取りに來い。値段は注文書に書いてあるから忘れるなよ」

「はい、わかりました！」

ティオは深く頭を下げて礼を言つて店を出て行つた。

残された店主は疲れたと溜息をつくと、改めて預かつた剣に触れる。「親子3代で来てくれるのは嬉しいが、あんな子犬で大丈夫なのか？」

？

武具屋を出た後は並んでいる店を適当に見て宿に帰つた。

買ったものは珍しい薬草を数種類、モンスターが出てくる場所を記した手作りの地図を購入。

明日のクエストに持つていくものをリュックからウエストポーチに詰め替えていく。

忘れ物がないかリュックをあさつていると、赤い石を見つけて手が止まつた。

「明日からクエストか……」

もう一度、自分を殺そうとしたアイアンンドールの姿を重い和えす。今は思い出すだけでも身震いするけど、必ず倒して見せる。決意を固めるように石を強く握つた。

「田畠、終了（後書き）

早く戦闘書きたいです、センセー……。
戦闘シーン書いてたまつが楽ですねえ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3541z/>

ティオの冒険記

2011年12月25日13時50分発行